2014年 秋号

僧　伽

第87号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241－5219
題字　本多　千翠

科学はとうてい完璧などと言えた代物ではない。ただ、人間が手にしている道具の中では、いちばん〝まし〟だというだけだ。

『人はなぜエセ科学に騙されるのか』
カール・セーガン

カール・セーガン
アメリカの天文学者。元コーネル大学教授。NASAにおける惑星探査の指導者。

誕生日問題

常徳寺　西山　彰

誕生日占いというものがある。何月何日生まれのあなたの今日の運勢は・・・・というものである。確かに私たちにとって自分が生まれた日というのは、特別な日である。そこに何らかの運命的なものがあると考えるのは自然かもしれない。

ところで、仮に四十人の人がいて、その中に、誕生日が一致する人が一組以上いる確率はどのくらいかご存じだろうか。双子はいないとして、一年三六五日で計算すると、何と八十九パーセントにもなるのだ。これが六十人の集団だと、ほぼ一〇〇パーセントに達する。（下のグラフ参照）信じがたいことだが、これは数学的に正しい数字なのである。だとすれば、六十人の人がいれば必ず二人は同じ運命をたどることになるのだ。もちろん、誕生日占いを前提にすれば、だが。

これは、「誕生日問題」と呼ばれており、高校の数学の教科書にも載っている有名な話である。

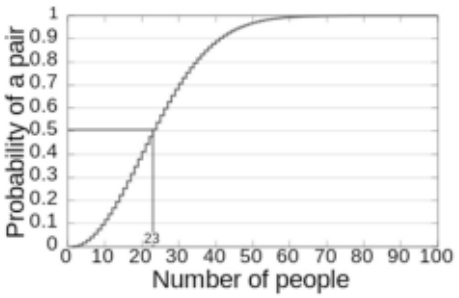
このように、統計的数値は、私たちの直感を大きく裏切ることがしばしばある。人の感覚というものが、いかに不確かで、思い込みで成り立っているのかということだろう。

確率や統計がなんだと開き直る御仁もおられるだろう。俺は数字よりも感覚を大切に生きているのだと。確かに、誕生日占いぐらいにいちいち目くじら立てるのは大人げないかもしれない。数字で割り切れないものにこそ、人生の潤いがあることも確かだ。

しかし、世の中には、人の思い込みを悪用した悪徳商売が意外に多いということは知っておくべきである。本号では、池内了氏の「疑似科学入門」という本を紹介しているが、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

さて、この誕生日問題は、そのまま「ご命日問題」になることに気が付かれただろうか。つまり年間二十三件以上の葬儀を行うお寺では、お葬式の日が重なる確率が五割を超えることになる。つまり二年に一度そのような偶然が起こることになるのだが・・・・。

ご門徒の皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。



n 人の中で同じ誕生日の人が少なくとも２人いる場合の確率 p は、

$$p_2(n) = 1 - \frac{365!}{365^n(365-n)!}$$

となり、$n = 23$ のとき、$p = 0.507\cdots$ となる。

写真（左）誕生日問題のグラフ　（右）巷で流行している誕生日占いの本

木村洋介

震災の記憶を未来へ

本屋さんで月光に照らされた風景の写真集を見つけ、深い蒼色で圧倒的な美しさに一瞬で心を奪われました。それが月光写真との出会いでした。

月光写真は光源が月明かりだけなので、フラッシュやライトを使うことができません。もちろん、カメラのオートフォーカスが効かないので、ピントを合わせるのも容易ではありません。通常の撮影の常識がまったく通用しないので、写真が撮れるようになるまで数年かかりました。しかも、満月やその前後の数日しか撮影に適しておらず、天気にも左右され、撮影のチャンスがとても少ないのです。

夜中の海や断崖絶壁、真っ暗な山奥などが主な撮影地です。現地に到着し車のエンジンを切ると闇に包まれます。森のざわめきや海の怒涛。緊張がピークになります。それでも撮りたい光景があるので、勇気を振り絞り暗闇に飛び込んでいくのです。私は、撮影には単独で行くと決めています。たった一人で月と向き合うことが大切と考えるからです。月明かりの神秘を写真に込めるには、暗闇の恐怖というか、畏怖を感じながら撮影に挑まなければならないのではないかと考えています。

私の撮影における成功は、自身の努力の他に、幾つもの素晴らしい偶然が重なり、それを運良く写真に納めることができたときに訪れます。ですから今日は良いものが撮れそうもないとすぐに諦めるのではなく、思わぬチャンスはいつ訪れるかわからないということを常に頭の片隅に入れて撮影に挑むことが大切です。それは撮影以外の出来事にも当てはまることだと思います。チャンスには順番は無くランダムに訪れるもの。そのサインを見逃さないように常にアンテナを張り巡らし、コツコツと地道に努力することが大切だと思います。

私は3・11以前から東北太平洋沿岸部の夜の風景写真をテーマとして撮り続けており、そんな中震災が発生し、美しかった沿岸部の風景が一瞬にして破壊されてしまいました。大津波により沢山の命が失われ、自然も町も全て消え去り二度と海にカメラを向けることは無いと諦めていたのですが、岩手県の陸前高田市に七万あった松原の中に一本だけ生き残った松の木があるという話を聞き、どうしてもその松に会いたいと思い、まだ復旧工事すら始まっていないような時期に車を走らせました。

夕暮れを迎えた頃に松の木と対面しました。この頃まだ松の木は生きていたのですが、今にも朽ち果てそうな弱々しい姿をしていました。次第に夜になり、かつて町があり夜でも明かりがあった陸前高田市は荒野となり、真っ暗な闇に包まれ不気味な程の静けさが訪れました。

すると、上空には震災前では明るくて見ることができなかった天の川が現れ、七月の夜空に織り姫と彦星の姿も見えてきました。煌めき輝く満天の星空を見上げると、思わず亡くなられた方たちと重ねあわせてしまいます。星になった命と奇跡的に生き残った一本の松の木。この光景を私が撮らなければ誰が撮るのだろうか？私にしか撮れない光景、そして絶対に撮らなければならないという使命感のようなものを感じシャッターを切りました。

その写真を発表せずに、記録としてずっと保存していこうと決めていたのですが、新聞社主催のフォトコンテストにおいて『復興への道のり』という部門があるのを知り、日本中に被災地の今を発信するならばこの方法以外は無いと考え、『強く、生きる。』というタイトルで応募しました。その結果、約一万点の応募の中から最優秀賞であるグランプリを頂くことができました。

この受賞をきっかけに、変わりゆく被災地沿岸部の風景を以前のように撮影しようと思うようになりまし

た。現在はめまぐるしく変わりゆく沿岸部の風景や、震災の傷跡である震災遺構を写真として残していく活動を行っております。悲しくも美しい、そして希望と光を見いだせる写真を伝えていきたいと考えています。

きむら　ようすけ
一九七八年　宮城県生まれ。月明かりに照らされた東北沿岸部の風景を撮影する月光写真家。
二〇〇五年から独学で写真を始め、フラッシュを使わず月光のみを利用した撮影法で様々なコンテストやメディアに作品を提供する。東日本大震災の被害を受けた後は、月明かりに照らされる沿岸部の風景とともに、めまぐるしく変わりゆく被災地の風景を撮影するようになる。
現在はブログ「遥かなる月光の旅」(http://bgrace.exblog.jp)にて作品を公開中。
この秋、徳法寺にて初の個展開催。

真宗人物伝　第三十五回

徳法寺　杉谷　淨

是信（ぜしん）

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十番である是信です。

俗名は藤原氏の流をくむ吉由大納言信明であったといいます。ところが罪を問われて越前に流罪となり、勅免の後、京都に戻ることなく、関東におられた親鸞聖人のもとを訪ね弟子となり、是信という法名を賜ったと伝えられています。

記録に奥州和賀郡一柏の是信房とありますから、現在の岩手県花巻市に居を構えたようです。関東に集中していた親鸞聖人の弟子の中で、奥羽に拠点を置いたのは是信だけです。どのような縁があったかは分かりませんが、三十六歳でこの地に来た是信は奥州を中心に布教した後、晩年には岩手県の紫波郡彦部に本誓寺を建立します。八十六歳でこの地で亡くなるまで、彦部には奥羽諸国から是信を慕って集まる人々が絶えなかったといいます。後に南部信直が盛岡を開いた時、彦部の本誓寺を盛岡に移し現在にいたっています。

是信を開祖とする寺は他に、秋田郡（秋田県）六郷の善証寺、常州府中（茨城県）の本浄寺、信濃国松城（新潟県）の本誓寺などがありますから、その教化は奥羽・北関東・北陸にまで及んでいたようです。親鸞聖人の教えを北日本に広げた立役者といえます。

さらに是信は親鸞聖人が親子の縁を絶ったと伝えられている、親鸞聖人の長男である善鸞上人とも交流していたようです。善鸞上人は会津の大綱に居を構え、後に「隠し念仏」と呼ばれる教えを広げたと言います。この教えは是信の布教先へ逆流し、東北一円に広がり、やがては全国に広がることになります。

隠し念仏の指導者は善知識と呼ばれ『御書』と呼ばれる秘伝書を臨終の前に次の善知識へと伝えていきます。最大三人にまで伝えることができたといいますから、ネズミ算式にその教えは広がりました。善知識から信心を得たことを保証された者が救われるというこの「隠し念仏」を、蓮如上人をはじめとする本願寺は厳しく否定してきました。

「隠し念仏」の本尊は、弘法大師（空海）、興教大師（覚鑁）、親鸞聖人とされますから、真言密教の影響を受けているようです。表向きは浄土真宗や曹洞宗など他の教団に属していますが、葬式などを寺で行った後に、内々で秘密の弔いを行うなどして隠れて活動していたので「隠し念仏」と言います。信者は、表向きの寺の教えを表法と呼び、隠し念仏の教えを内法（内信心）と呼んでいました。

江戸時代には本願寺や諸藩からも摘発を受け、死罪に処せられる者までますが、絶えることはありませんでした。明治時代後期には、名古屋や岐阜、浅草や横浜などで活発に活動し、その様子を批判した暴露本が出版されています。北陸にも多数存在しましたが、戦後はその数を急速に減らしています。

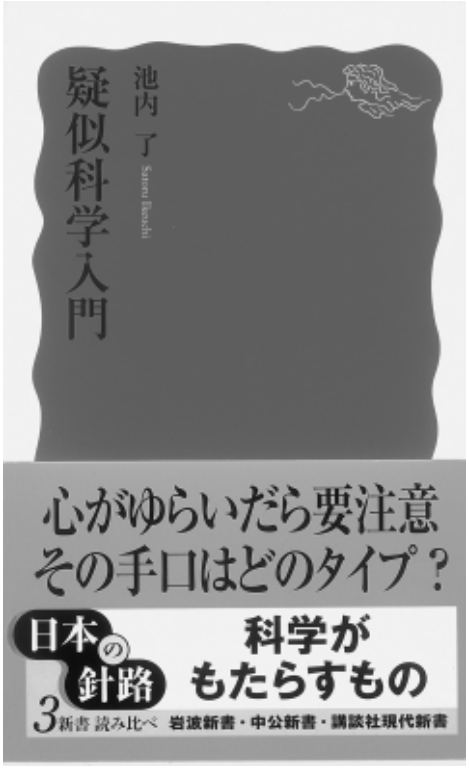
現在、彦部にある「是信房墓所」は、紫波町指定文化財の史跡とされ、荼毘に付された場所は「上人塚」として花巻市の農村公園の一部として整備されています。近くに行かれることがありましたら、歴史を大きく動かした方のもとを訪ねてみてはいかがですか。

本の紹介

『疑似科学入門』

池内　了　著

岩波新書



皆さんは、「マイナスイオン」という言葉を一度は耳にされたことがあるだろう。一時は空気清浄器などで、マイナスイオンの付いていない商品を探すのは困難だったと言われている。「じゃあ、マイナスイオンはなぜ体に良いと言われているのですか。」と問われて、正確に答えられる人がいるだろうか。

実は、「マイナスイオンは健康に良い」ことの科学的根拠はほとんどないのである。それどころか、多くの科学者はその効果について否定的である。そもそもマイナスイオンの定義すらあいまいなのである。

ようやく、このマイナスイオンの効能をうたい文句に不当に高額で販売される商品について、公的機関によって指導、排除命令などが行われるようになった。

結局のところ、プラス電荷をもつ悪者の活性酸素を中和することができるという印象を利用した商売にすぎなかったのだ。

これは、近年もっとも典型的な疑似科学の例であると言われている。疑似科学とは、「エセ（ニセ）科学」「トンデモ科学」「超常科学」などと呼ばれているものの総称である。

このマイナスイオンは、疑似科学の典型的特徴を備えていると言える。まず第一に、科学的な装いをしていながらその実体がない。つまり科学的な根拠がないにもかかわらず、あたかも根拠があるかのような主張をしている点。第二にそれがビジネスに結びつくことによって、少なからず社会に影響を与えている点である。

疑似科学は、ここに上げた以外にも数多く存在する。物理学用語では、波動、フリーエネルギー、ファジー、ゲルマニウム、磁気効果。化学用語では、フラボノイド、フリーラジカル、ポリフェノール、アントシアニン、活性酸素、ドコサヘキサエン酸。医学用語では、クラスター水、アルカリイオン、ホメオパシー・・・・。

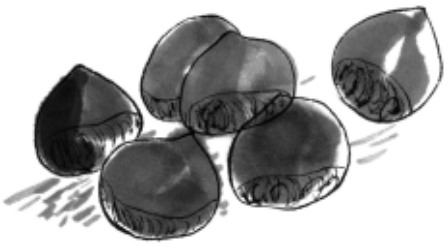
これらは、物品の商売に絡む場合が多い。そして、これらの科学用語を使われると、なんとなくありがたそうに思えてしまう。しかし、これらが本当に重要な役割を果たしているかどうかは疑わしい場合が多いことはあまり知られていない。

池内氏は、これらの、科学を装ってはいるが科学的根拠のないもの、または確定していないものを、第二種疑似科学と分類している。さらに氏は疑似科学の範囲を広げ、占いや超能力などを第一種、複雑系*の絡んだものを第三種と分類している。

こうしてみると、私たちの身の周りには、疑似科学があふれかえっていることに驚かされる。疑似科学の問題は奥が深く、これは明らかに宗教的問題である。ここまで疑似科学が流行る理由の一つに、人は非合理的なものに惹かれる傾向があるのだと筆者は指摘する。その上で、疑似科学が人間本来の考える力を失わせると警鐘を鳴らしているのである。

（彰）

＊複数の要素が複雑に入り組んでいて、ただちに単純な因果関係を見出し得ないような状態のもの



真宗豆知識

善哉（ぜんざい）

「善哉」というと、どのような食べ物を想像しますか。定義としては、小豆を砂糖で甘く煮て、餅や白玉団子、栗の甘露煮などを入れたものの事だそうです。

私が食べていたものは、粒餡の小豆汁に餅を入れた温かいものですが、最近大手コンビニに置かれているのは、あんこの上に白玉団子を乗せた冷やして食べるものです。これは関東風ということで、東京の下町育ちの妻によると「金沢でぜんざいと呼んでいるものは、東京ではお汁粉。粒あんでもこしあんでもお汁粉。ぜんざいは夏に白玉に粒あんを乗せて冷たくして食べる。つまり冷やし白玉ぜんざい。」だそうです。地方によって色々な種類があるようです。

この和風スイーツ「善哉」の語源には二つの説があります。その一つが仏教用語に由来するというものです。浄土真宗で最も大切にされているお経に『仏説無量寿経』があります。この中で、お釈迦様が弟子の阿難が素晴らしい質問をした時に「善きかなや、阿難。問いたてまつるところ、甚だ快し。」（善哉、阿難所問甚快）と答えているところがあります。この「善きかなや」が「善哉」です。経典の中では、この阿難の問いに答える形で、阿弥陀仏や極楽浄土についてのお釈迦様の説法が始まりますから、大変に重要な場面になります。

この様に「善哉」とは、お釈迦様が弟子を讃える時に語る言葉として経典によく用いられています。この言葉を、有名な一休さんが今「善哉」と言われているものを食べた時に、そのあまりの美味しさから「善哉」と叫んだのがその由来とされます。ちょっと出来すぎているようにも思えますが、当時も有名人であった一休さんですから、有り得ないこともなさそうです。

もう一つは、出雲の佐太神社に伝わる神事「神在祭」で振る舞われた「神在餅」を由来とする説です。「じんざいもち」の「じんざい」が訛り「ぜんざい」となったと言います。この神事に神々をお送りする神等去出（からさで）という神事があります。この時、神前に供えていた餅と小豆を一緒に煮て小豆雑煮を作り再び供えるのが「神在餅」です。名前だけではなく、確かに材料も今の「善哉」と同じです。

かつて松江藩は世間で「善哉」というのは間違いで「神在餅」という出雲由来の言い方をすべきであると主張していました。もっとも「神在餅」は雑煮なので「善哉」のように甘かったのかどうかはわかりません。金沢で報恩講の料理として伝わっている小豆汁は甘くはありません。小豆汁は当時それほど珍しいものではなかったのでしょう。それを砂糖が貴重だった時代に、あんことして食べたのが誰かということです。今でも出雲の佐太神社は『ぜんざい発祥の地』とされていますが、真実の程はわかりません。

（浄）

徳法寺のホームページができました

今更ながら、ホームページを作りました。「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスはhttp://tokuhou-ji.com/です。是非覗いてみてください。

杉谷浄のラジオ案内

十一月四日(火)
十二月二日(火)
一月六日(火)
二月三日(火)

FM-N1(七十六・三MHz)で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝六時からです。インターネットでも聞けます。

エッセイ

なぜ「科学」なのか

西山　彰

今回の僧伽の私の原稿は、期せずして科学と数学を扱ったものになった。不審に思われた読者もおれられると思うので、少し言い訳をしておきたい。

私はこの僧伽の創刊時、「宗教は非科学的か」というエッセイを四回にわたって連載させていただいた。それから二十年、このテーマは形を変えながら私の中でさまざまに発酵してきた。その中で出会ったのが、この疑似科学の問題だったことを申し述べさせていただきたい。

あの当時私の頭の中にあったのは、モンキー裁判のことであった。アメリカには、今も、キリスト教の聖書の記述に矛盾することを理由に、ダーヴィンの進化論を排斥しようとする人々がいる。キリスト教原理主義者と言われる人々で、彼らは公共教育の場で進化論を子供たちに教えることに反対し裁判を起こしたのだ。そしていまだにはっきりした決着を見るに至ってはいない。

我々日本人の感覚からすれば、考えも及ばない発想である。しかし、よく考えてみればまったく理解できないわけではない。彼らからすれば、教会の中では聖書を信じ、一歩外へ出たら進化論を信じるような器用なことはできないということなのだろう。

これはある意味、信仰に真面目であるということである。日本ではそこまで宗教が深く生活に根付いていないから、こんなことが問題にならないだけなのだ。これは科学と宗教のかかわり方に直接関するものであり、決して日本でこの問題がすでに解決しているというわけではない。

その証拠に日本で、宗教を信じるというと、科学に背を向けることが、ほぼ同義で使われることが多い。新興宗教の信者に疑似科学の信奉者が多いのは偶然ではないのだ。そこには、宗教に深入りすることは、世の中に背を向けた変人であるとのレッテルを張られることにもなりかねない状況がある。

健全な宗教とは何だろうか。子供やお年寄りから、近代的な教養を身に付けたインテリにまで等しく受け入れられるような宗教こそが、健全な宗教であると言えないだろうか。手前味噌で恐縮だが、浄土真宗（特に大谷派）は、数少ない健全な宗教の一つであると私は信じている。清沢満之を筆頭とする明治の近代教学の先駆者たちの労苦は、まさにその健全性を保たんが為のものであった。

その努力を無駄にするかどうかは、私達一人一人にかかっていると思われる。

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎報恩講

十月十日（金）
お逮夜　午前十時
お日中　午後一時半
法話　佐々木五六師

◆徳法寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎お講（石坂同信会主催）

毎月二十一日
午後七時半より
講師　十月　幸村　明
十一月　杉谷　淨
十二月　荒木　範夫
一月と二月はお休みします。
ご自由にご参加ください。

編集後記

今回の表紙で西山さんが紹介してる誕生日が一致する確立は面白いですね。思い込みが激しいと大切なことが見えなくなる気がします。宗教は気の持ちようだと言われることがありますが、これだとまさに思い込みです。仏陀とは目が覚めた人ということですから、仏教は目覚めの宗教です。目を曇らせるのではなく、現実を見据えて生きていきたいものです。（淨）

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）